荷風日記の新しい見え方

――吉野俊彦著『「断腸亭」の経済学　荷風文学の収支決算』――

中澤　千磨夫

世紀の変わり目。私たちの生活はどうなっていくのだろうか。先行きが不透明に思われる。それは、私たち日本人のほとんどが、今も二十世紀後半のインフレ時代の生活感覚を引きずったままで、デフレ基調が既に始まっているこの時代にとまどっていることの表れである。「これまで日本では、インフレの意識が、国民全体を支配してきたのですが、こんどは逆に、デフレが急速に、驚くべき速度で定着しようとしていることを認識しておかなければなりません。そして、これにもとづく生活設計の変更を急がなければならないのです。これは高齢者だけでなく、世代のいかんにかかわらず、国民全体に認識の変更、あるいは意識の改革が求められているのです」と長谷川慶太郎は、中村嘉人との共著『定年後とこれからの時代』（一九九九・一二、青春出版社）でいう。

二十一世紀末の人間の平均寿命は百二十歳代と、長谷川は大胆な予測をする。それを保証する一つは、医療技術の飛躍的進歩だ。もう一つが平和。イギリスの平均寿命は、十九世紀の百年間で三十代前半から六十代前半へ

と三十年も伸長した。その伸びも二十世紀の百年では十年そこそこに鈍化する。その理由を、長谷川は戦争に見る。二十世紀は、戦争の世紀。第一次、第二次の世界大戦と米ソ冷戦という三度の大戦争が繰りかえされた。「戦争は短命を生む」。戦勝国であったイギリスにも、厳しい負担を課したということなのだ。核という軍事技術の進歩により、もう世界規模の戦争は不可能になったというのが、長谷川の認識だ。同時に民族主義の放棄が課題となり、国際主義に進むというのだ。ドイツとフランスの長い軋轢を越えて、ECは歴史的な実験に踏み出している。日本にしても、このまま労働力人口が減少し続ければ、否応なく外国からの移民を受け入れざるを得なくなり、単一民族幻想は急速に崩れさっていくだろう。民族主義から国際主義といえば、ECに先んじて多民族国家の実験を行ったのがソ連。ソ連の崩壊は、理念と現実のギャップにこそ起因するのだ。「なぜ「社会主義」国家が崩壊したのでしょう。端的にいえば、七〇年以降、資本主義社会で高速度に進行した高度技術化社会、高度情報化社会に対応することができなくなったことにあります。つまり、経済競争で追いつけなくなった、ということです」というのは、鷲田小彌太『考える力の冒険　自分と向きあう哲学ノート』（一九九四・一、PHP研究所）である。ペレストロイカとグラスノスチというゴルバチョフの改革が、崩壊の引き金になったのは「皮肉なこと」と、鷲田は付け加える。

基本的には、長谷川慶太郎のいうように平和が基調の時代がやって来るのであろうし、そうなって欲しい。ただ、地球の重さよりも一杯の紅茶を選ぶ地下生活者の狂気があり得るのだという想像力は、どうしたって確保しておかなければならないだろう、というのが私の考えだ。オウム真理教の一連の事件は、まさにそのような恐怖によって私たちを震撼させたのである。007シリーズ第十九作、マイケル・アプテッド監督『ワールド・イズ・

ノット・イナフ』（一九九九年）に描かれたような核テロを、絵空事と笑って済まされるだろうか。この映画で、レナード（ロバート・カーライル）が盗みだしたのは、カザフスタン共和国にある旧ソ連軍の核兵器なのだ。おお、恐い。日本海のすぐそこ、ウラジオストク港に、耐用期限の切れた原子力潜水艦が幾隻も繋留されていることは周知の事実ではないか。

チェルノブイリ（一九八六・四・二八）、スリーマイル島（一九七九・三・二八）に続く三番目の被害規模となった茨城県東海村のＪＣＯ臨界事故（一九九九・九・三〇）は、確立しているかに見える安全管理のシステムが、ルーティーン・ワークの中でこれほど簡単に崩れてしまうことを見せつけたのではなかったか。危機管理に関する日本の国際的信用は、完全にゆらいだのである。そのような非常事態に、責任者たる科学技術庁長官（事故時は有馬朗人文部大臣が兼任）が、予定されていた内閣改造でいとも簡単に交代してしまうというこの国の政治感覚は、不思議というしかない。ＪＣＯも政府も責任を取ろうとしない。まさに無責任天皇制を絵に描いたような出来事ではないか。

この臨界事故について、きわめて適切な評言を加えたのは、加藤典洋「臨界事故の公的性格」（『毎日新聞』一九九九・一一・一、夕刊）であった。加藤がいう「公的性格」とは、核の災害は一国を越え、世界的規模で広がるということが一つ。これはチェルノブイリの大事故で身に染みたことだ。もう一つは起きてしまった事故を収束させるために死を覚悟しなければならない人が出るということだ。死を覚悟するという深い課題を抱えこまされることで、万人に関わるということなのだ。それはチェルノブイリで防御服も纏わず作業した多くの人々、そして不幸にも東海村事故で殉職した大内久さんたちが提起した問題である。加藤はいう。「今回の事故で銘記す

べきことは、核に関する人々の意識が他のどの国よりも高く、原子力行政がどこよりも細心に運営されていると自他共に信じられてきた国で、他の国では考えられないような二重三重のルール無視による事故が起こったことである。（略）／（略）これまでわたし達は、世界で唯一原子爆弾を投下された国に住む者として、核の被害の悲惨さを他のどの国民よりも骨身に染みて知った国民であると自任してきた。しかし、五十四年たち、いまわたし達にあるのは、核アレルギーであるというより、核マヒ、核慣れ、いわば、核へのタカくくりなのである。／核の悲惨をよく知っていると慢心しているうち、スリーマイル、チェルノブイリといった世界の経験に追い越され、いつのまにか、わたし達は、ウサギと亀のウサギのように、世界でも、ひときわ核に対する想像力と感覚の乏しい国民になっている」と。ドストエフスキー地下生活者の一杯の紅茶に戻れば、核戦争であれ核事故であれ、幾重ものシステム管理を突破してしまう狂気もあり得るということだ。

長谷川のいう百二十歳はともかくとしても、六十、七十どころか八十をどう生きたらよいかという時代が、既に到来しているのだ。しかも、超低金利が確立したデフレ時代である。退職金や年金を元本に運用するというインフレ時代の発想は破産してしまったのだ。「インフレからデフレへの転換によって発生する、個人の金融資産運用の失敗の責任はあくまでもその個人のもの」との自覚が必要と、長谷川慶太郎はいう。高齢に備え、「生活設計の変更を急がなければならない」のだ。それには「自分が保有している資産を極力「流動化」しておくことが必要」で、社会福祉のシステムが充実していて日本よりも物価水準が低いような外国で老後を送るという選択も考えなければならない。その上、かつての地位や経歴にこだわらず、世代を越えて交流し勉強を続けることが必要だと説くのだ。

長谷川が『定年後とこれからの時代』の理論編だとすれば、中村嘉人は実践編を受け持つ。中村は札幌に本社を置く化粧品や日用雑貨の卸会社・粧連の社長を六十歳で自ら退き、作家に転身した。六十歳からの五年間は、楽しい定年後のための試走期間だと位置づけている。爪切りは「スワダのニッパー」、カカトのザラザラには「ケラチナミン・クリーム」、歩くのは「リーボックのウォーキング・シューズ」といった具体的な商品名が、肉体の衰えを補償する小道具として列挙される。なにしろ中村は六十五歳にして自動車運転免許を取得してしまったのだ。最近、女優の有馬稲子もまた、六十五歳で免許を取ったという。メルロ＝ポンティ風にいえば、車は眼鏡や杖と同じく自分を外へと延長していく道具であるから、免許のあるなしは行動範囲の広狭及びフットワークの軽重に大きく影響する。中村の場合、社長時代は送迎を初めとして、運転手任せが可能だったものを、自分でやろうというのだ。六十代にしての決断に必要なのは、時代に即応していく見事なまでのしなやかさだろう。長谷川がいっていた経歴にこだわらない交流も、中村の若さを保っている。何よりの秘訣は、知的好奇心のみずみずしさに磨きをかけ続けることなのであろう。

さて、デフレの時代をどう生きるかという課題を私たちは負っているのだが、ここに一人の偉大な先達を紹介しよう。永井荷風である。荷風が活躍した二十世紀の前半は、インフレとデフレの交錯する時代だった。荷風というペルソナが、激動する時代とどう向かい合ったかを知るには、何よりその膨大な日記によるのがよい。荷風日記の本格的な研究は、大野茂男の『荷風日記研究』（一九七六・三、笠間書院）をもって嚆矢とする。その後、米仏遊学時代の日記については、平岩昭三の『『西遊日誌抄』の世界――永井荷風洋行時代の研究――』（一九八三・一一、六興出版）があるが、『断腸亭日乗』についてのまとまった研究は、川本三郎の『荷風と東京　『断

腸亭日乗』私註』（一九九六・九、都市出版。初出は『東京人』一九九二・一～九四・一二）を待つしかなかった。川本の仕事が、東京という土地にこだわったものであったとすれば、最近出版された吉野俊彦の『「断腸亭」の経済学　荷風文学の収支決算』（一九九九・七、ＮＨＫ出版）は、荷風の金銭感覚、経済、つまり金に絞って考察されたものである。二冊とも五百ページを越える大著であることからも、荷風日記がまだ掘られはじめたばかりの豊かな金脈であるのが分かる。

日本銀行の調査局長、理事を歴任した吉野の立場は、はっきりしている。

日本銀行出身のエコノミストが本職である私の眼からみて、いささか不十分だと思われるのは、『日乗』（略）の経済金融面の分析である。『日乗』の過半が荷風の女性遍歴とそれに基づいた彼の作品創造過程の叙述によって占められながら、それに要したコストの変遷を歴史的にたどったものはあまりない。これに加え、準戦時から戦時、戦後の進展過程で、『日乗』に女性遍歴よりも経済金融関係の叙述が多くなり、とりわけ民需物資が不足し公定価格をはるかに上回る闇価格が跋扈（ばっこ）して国民生活が圧迫されてゆく姿、ならびにインフレ対策として実施された預金の封鎖や新旧円の切り換えなどにいかに対処したかを具体的に叙述している。この点で、経済学者の河上肇（はじめ）の日記などに匹敵する第一級の経済史の資料になっている事実について、荷風が若い頃横浜正金銀行の行員だった経験や、父の残した遺産としての不動産や有価証券処理の必要や、女性遍歴のコストとの関係を十分に論じたものは見当たらないように思われる。私の狙いは、この穴を埋めるとともに、一歩進んで『日乗』の通読により大正・昭和四十数年にわたる経済変動史をフォローする点にあり、一口で言えば本書は

文学史的価値の高い『断腸亭日乗』の、経済史的分析であるということに尽きるのである。

荷風日記が経済史の資料として優れている理由を、吉野は七点に分け列挙している。整理してみよう。第一は、荷風が横浜正金銀行という外国為替専門の特別銀行行員としてニューヨーク支店、リヨン支店に勤務していたこと。荷風の経済感覚・知識の元がここにあるというのだ。第二は、父・久一郎の死で家督を相続し、不動産・有価証券・預金などの財産を自分の責任で処理したこと。第三は、多くの女性と関係し、そのコストを細かく記録していること。第四は、原稿料や印税収入が途絶えた厳しい時代に、預金のシフトや株式売買によって資産を守る工夫をし、それがその時代の経済情勢を反映していること。第五は、慶応義塾大学文学科教授時代『三田文学』の編集責任者を勤め、また私家版刊行などの際のトラブルに対処し、経済知識を増したこと。第六に、物価・株価・サービス価格などに深い関心を示し、記録し続けたこと。第七には、社会の動向に目を注ぎ、政治家の腐敗を批判し、鋭い文明批評を展開したこと。

荷風が『断腸亭日乗』を起筆するのは、一九一七年（大正六年）九月十六日。第一次世界大戦（荷風は「欧洲戦争」と記している）のさなかであった。あたかもインフレの時代。翌年、荷風は父から受けついだ大久保余丁町の家を処分する。これにつき、吉野はいう。

一連の荷風の不動産売却と株式買入の時日を『日乗』から跡付けてみると、そのタイミングが実に見事だというほかはない。余丁町の土地建物を売却する話がまとまった大正七年十一月十一日は、第一次世界大戦の休

戦条約締結の日で、物価・株価は暴落し始め、地価も大戦中の峠を示した時期であった。休戦による反動は一時的なものに留まり、大正八年春には一段落して大正九年三月までは変態的好景気の下、物価・株価・地価が暴騰するのであるから、休戦直前に土地を売ることなく、大正九年まで保有し続ければ譲渡益はもっと多かったであろう。しかし、大正九年三月以降、大暴落の嵐が吹き荒れることを思えば、腹八分目という諺にもある通り、大戦中のピークの時点で土地を売却しただけで、荷風は莫大な利益を手にしたことになる。また、土地売却代金のすべてを銀行預金の形で保有することなく、休戦直後の反動期のボトム時に株式に転換しておいたことは、それが暴騰直前であるだけに、玄人はだしといっても過言ではあるまい。

第一次大戦後の「変態的好景気」により、成金が出現。料亭の玄関で履き物を探すために百円札をロウソクがわりに使ったなどというひどい話が知られている。一九一九年（大正八年）といえば、巡査の初任給が二十円（『値段の明治大正昭和風俗史上』一九八七・三、朝日文庫）、ダイヤモンド一カラットが八百円（『値段の明治大正昭和風俗史下』一九八七・三、朝日文庫）の時代である。この「変態的好景気」の反動で、井上デフレがやってくるのである。井上デフレとは何か。吉野の『知恵をしぼれ！　デフレを生きる発想』（一九九六・二、日本経済新聞社）を参考にしよう。日本銀行総裁井上準之助は堕落した成金の姿を憂い、反動期が来ると何度も警告演説を行った。海外では戦争の傷から回復し、日本の輸出増はストップする。一九二〇年（大正九年）三月に至り、一億三千五百万円もの貿易赤字が記録され、株価が暴落する。大変なデフレ時代に突入したのである。これに拍車をかけるのが一九二三年（大正十二年）の関東大震災であり、金融恐慌、世界大恐慌へと続いていくので

ある。

『知恵をしぼれ！』には「永井荷風が綴ったデフレのあとさき」という章が立てられており、『「断腸亭」の経済学』の前史的な位置を占める。『知恵をしぼれ！』はまず、「物価の継続的下落」への荷風の関心について、『断腸亭日乗』に照らして言及する。吉野が引いている一九三〇年（昭和五年）十一月九日の記事を見よう。

午後微雨、夜三番町に往く、途次市ケ谷辺汁粉屋三好野の店に値下断行とかきし張紙を見たり、市中一般餅菓子も一銭値下せし由、自働車は是まで市内一円の定めなりしがこの春頃より五拾銭となり今は参拾銭となる、

（『荷風全集』第二十二巻、一九九三・八、岩波書店）

当時荷風は、三番町で関根歌に幾代という待合を営業させていた。この待合営業について、『「断腸亭」の経済学』は、「家屋の表面上の賃貸契約の当事者はうたで、荷風は賃貸料支払の保証人になるという形をとっている。月々の手当百五十円を別途支払うにしても、営業に伴う経費は、家賃を別として、やがて営業収入によってバランスさせるようにしたし、彼女も客の未払代金の取り立てには精一杯の努力をし、どうやら幾代の営業収支は赤字にならないですんだらしいから、荷風は待合営業についての資本支出と彼女の生活費を支払うだけで、営業上の赤字を毎月穴埋めするような負担はしなかったと想像される。昭和二年金融恐慌後の不況期としては、相当したたかな営業ぶりだったといってよいであろう」と評している。

本書は荷風の女性遍歴とそのコストに多くのページを割いているのだが、荷風の「したたか」ぶりを示す例を

もう一つ紹介しよう。芸者の身受けについてである。身受けには、単なる身受けのほかに親元身受けと称するものがある。「そもそも身受けとは（身請けとも書く）、徳川時代の身売り的年季奉公人に関する用語で、前借金を受け取って一定期間売春行為をすることを約束した場合、その年季が満了するまでは、身柄を拘束され、しかも前借人の親は保証人たることを要求される。年季が明けると拘束を解かれるが、年季中に第三者が借金を返済すれば、彼女は奉公契約を解除して自由の身になれる。これを身受けというが、現実には借入金の残高だけでなく、残存年季中の推定収入や、雇主や友人等への祝儀も加算され、したがって身受けには多額の金が必要であった。身受けは、通常遊女にほれた金持の客筋が行うが、保証人たる親が借金を返済するという形をとる場合は、残存年季の推定収入や祝儀の支払いは不要とされ、これを親元身受けと称した。明治維新後も、芸妓、娼妓にはこの徳川時代の慣行が準用され、遊び慣れた客筋はしばしばこの方法を利用して、落籍祝いに多額のコストを支払うことを免れた。経済観念の発達した荷風は、この親元身受けの方法を活用したのである」と、吉野は報告している。荷風の「したたか」ぶり、恐るべしではないか。荷風は単なる金持ちの坊ちゃんなどではなく、海千山千の遊び人であった。

さて、引用の物価に戻ろう。餅菓子が何を指すかは不明だが、『値段の明治大正昭和風俗史上』の「大福」の項を見ると、一九二二年（大正十一年）には一個二銭、一九三四年（昭和九年）にも一個二銭（六個十銭）、一九三七年（昭和十二年）には一個三銭であった。荷風日記にある「一銭値下」が一個の値段なのかどうかも不明だが、そうだとすると、まあざっと半額になったということになるではないか。ちなみに、一九三一年（昭和六年）の小学校教員の初任給は四十五円から五十五円。一九三〇年（昭和五年）の江戸前寿司並が二十五銭、天丼

並が四十銭、最中一個は一銭であった（同前書による）。東京に円タクが出現するのは、一九二五年（大正十四年）末のこと（大阪はその前年のことで、これが日本初）であった。東京市内一円の均一料金が崩れた様を、荷風は記録していたのであった。

『知恵をしぼれ！』によれば、一九三〇年の卸売物価、東京小売物価は対前年比それぞれ、マイナス一七・七パーセント、マイナス一四・五パーセント。翌一九三一年には、それぞれマイナス一五・五パーセント、マイナス一二・六パーセントと続落し、典型的なデフレ症状を示した。

この頃の荷風日記から引いてみよう。まず、一九三〇年一月四日。「昨年より銀行取附騒ぎ起るべしとの風説頻なれば万一を慮り朝の中京橋第百銀行に往き預金を引出して三菱銀行に移し入る」（『荷風全集』第二十二巻）。三菱銀行は荷風のメイン・バンクではあるが、何かことがある場合に備え、大銀行に預金を移し変えるという事態は、まさに今日そのままではないか。次は、同年十二月三十一日。「今年夏過ぎてより世の中不景気の声一層甚しくなり、予が収入も半減の有様となれり、郵船会社の株は無配当となり、東京電燈会社の如きも一株金壱円の配当なり」（同前）。「郵船会社」は、荷風の父・永井久一郎（禾原）が上海支店長、横浜支店長を歴任した日本郵船、「東京電燈会社」は東京電力であるから、荷風は大企業の株式を所有していたわけだ。一九三一年六月十九日には「税務署より前年度所得金額の通知書来る、金参千参百六拾円の由」（同前）とある。ちなみに、この年の内閣総理大臣の月給は八百円、東京府知事の年俸は五千三百円である（『値段の明治大正昭和風俗史上』）。

同年八月二十四日の記事が面白い。「小説家徳田秋声老後貧困甚しきを以て、里見淳（ママ）（引用者注：弴の誤記。旧版の『荷風全集』第二十一巻、一九六三・一〇、岩波書店にはママルビが付されているが、新版第二十二巻に

はママルビがない)、菊池寛、中村武羅夫などいふ文士発起人となり寄附金募集の企をなすと云、日暮銀座に往き銀座食堂に飯す、途上大嶋隆一氏に逢ふ、驟雨沛然たり、酒館太訝に登りて雨の晴るゝを待つ、女給の談を聞くに尾張町角の酒亭ライオン此程閉店し八万円にて売払ひとなり、女給は四五十人そのまゝタイガ方へ引取られし由、雨歇まざれば車を倩(ママ)(引用者注：旧版全集新版全集ともにママルビは付されていないが、請の誤記だろう)ひて帰る」(『荷風全集』第二十二巻)。徳田秋声の窮状を救うべく、寄付金依頼が荷風の元にも来たのであろう。荷風はそれを記録には残したが、おそらく応じてはいない。人を頼らず、頼まれもしないというのが、荷風の生き方だから。前年四月八日には「この頃都下の私立学校経営困難の故にやいさゝかの縁故をたよりになし寄附金の請求をなすもの尠らず、鈴木米次郎氏経営の私立音楽学校の如きは即その一例なり、鈴木氏は余が十四五歳のころ一橋中学校に在りし時唱歌の教師たりき、昨年来屢活版摺の郵書を送り来りて寄附金の請求をなせり、三田の慶応義塾も同校維持会の名義にて寄附金を募ること屢なり、吾人は既に国税の過大なるに堪えざらむとす、国税の他に町会の会費あり氏神の月掛金あり、されば学校の寄附金募集に対しては一切之に応ぜざる事となせり」(同前)という記事もあった。八万円でライオン売却というのも不況を反映している。これはタイガの女給から聞いた噂話であるが、丹念に噂を書きとめているのも、荷風日記の大きな特徴である。一九三一年九月二十日には「松竹社芝居不入にて八月九月両月の損失三十万円に及びし由」(同前)と、来客から聞いた話を記している。三十万といえば、今なら十億円ほどになろうか。この年十二月一日には、中央公論社から『つゆのあとさき』の印税として小切手千四百八十一円を受けとっている。定価一円五十銭、九千九百九十部発行の一割分であった。少々計算が合わないが、税金の関係だろうか。引税引きで著書を購入したためだろうか。

やや長いが、一九二九年（昭和四年）九月十九日と、一九三二年（昭和七年）四月九日の記事を続けて引用しよう。

世間近頃に至り俄に都下のカツフエー及舞踏場の弊害を論ずるもの多し、警視庁にてはわざ〳〵往復端書を世間知名の人の許に郵送しカツフエー取締に関する意見を問ふ、これは当世流の人気取りの策畧なるべしと雖実に愚劣の至りなり、数年来カツフエー及舞踏場の繁昌するは世人久しく藝娼妓に厭き西洋風の売女を要求しゐたる結果なり、独〻一や二上り新内すたれてキオロン入りの門附唄流行するを見ても世間の風潮は推知せらるべし、女給踊子などの新に出で来りしがために淫（ママ）（引用者注：旧版全集新版全集ともにママルビは付されていないが、淫の誤記だろう）風俄に熾となりしが如く思ふは謬りなるべし、日本人は何事に限らず少しく目新しきもの〻盛になり行くを見れば忽恐怖の念を抱く、島国根性今以て失せやらぬものと見えたり、今日の時勢を見るに女給踊子の害の如きはたとへこれ有りとなすも恐る〻に足らず、恐るべきは政治家の廉恥心なきことなり、社会公益の事に名を托して私慾を逞しくする偽善の行動最恐るべし、男子変節の害に比すれば女給踊子の密に淫（ママ）を売るが如きは言ふに足らず、カツフエーの舞踏場取締のことにつきては余は別に意見あれどこゝには贅せず、（同前）

余つら〳〵往事を追憶するに、日清戦争以来大抵十年毎に戦争あり。即明治三十三年の義和団事変、明治卅七八年の征露戦争、大正九年の尼港事変の後は此度の満洲上海の戦争なり。而して此度の戦争の人気を呼び集

めたることは征露の役よりも却て盛なるが如し。軍隊の凱旋を迎る有様などは宛然祭礼の賑に異らず。今や日本全国挙つて戦捷の光栄に酔へるが如し。世の風説をきくに日本の陸軍は満洲より進んで蒙古までをわが物となし露西亜を威圧する計畧なりと云ふ。武力を張りて其極度に達したる暁独逸帝国の覆轍を践まざれば幸なるべし。百戦百勝は善の善なる者に非らず、戦ずして人の兵を屈するは善の善なる者とは孫子の金言なり。此の兵法の奥義は中華人能く心得てゐるやうなり。（同前）

『「断腸亭」の経済学』で、荷風日記を経済史的史料と評価していた第七点目。文明批評に関わる言辞である。前者にある警視庁からの「往復端書」は、荷風の許にも届いたのであろう。それを記録し、日本人の「島国根性」と「政治家の廉恥心なきこと」に及ぶ。『知恵をしぼれ！』は、「永井荷風の面目躍如たるところ」という。後者について、『知恵をしぼれ！』は、「この時期に、これだけはっきり前途を見定めていっているのは、大変な見識だと思うのです。／この荷風の見解は、政治家が暗殺されたり、軍国主義が出てきてえらいことになる、というのがデフレの結末だということをよく表していると思います」という。「独逸帝国の覆轍」は、もちろん第一次世界大戦敗戦を指す。ドイツ自身、その後同じ轍を踏んだのであり、日本もまた。日本中の戦勝気分への皮肉もさりながら、「中華人」の「心得」を「孫子の金言」に例えているのは、同国人としてきわめて危険なことなのであった。

吉野の「暗殺」という言葉に触発されて、ちょっとだけ脱線しよう。一九二一年（大正十年）十一月四日の原敬首相暗殺を、荷風がどう見たかである。翌五日、荷風日記は「街上号外売の奔走するを見る。道路の談話を聞

くに、原首相東京駅にて刺客の為に害せられしと云ふ。余政治に興味なきを以て一大臣の生死は牛馬の死を見るに異ならず、何等の感動をも催さず。人を殺すものは悪人なり。殺さるゝものは不用意なり」（『荷風全集』第二十一巻、一九九三・六、岩波書店）と記録している。一九三二年（昭和七年）の五・一五事件、一九三六年（昭和十一年）の二・二六事件に際しては、軍人の暴挙に痛罵を浴びせた荷風である。平民宰相の死を「牛馬の死」に等しいといい、「不用意」とまでいった者はいるだろうか。私は、こういうものの見方こそ、荷風の面目躍如たるところといってみたい。

金と荷風といえば、石川淳の「敗荷落日」（『新潮』一九五九・七）に触れないわけにはいかない。石川は、この苛烈な追悼文で、荷風を「ランティエ」と呼んだのだった。晩年の荷風の仕事として『葛飾土産』しか認めず、「肉体の衰弱ではなくて、精神の脱落」と痛罵した石川淳自身が、『狂風記』、『六道遊行』と最後の最後まで見事なまでの精神の光芒を描いたことは、とりあえず措く。ランティエについて、石川は次のように書く。

食ふにこまらぬといふ保証のはうは、荷風は終生これをうしなはず、またうしなふまいとすることに勤勉のやうであつた。ところで、この保証とはなにか。生活上避けがたい出費にいつでも応ずることができるだけの元金。それを保有するといふことになるだらう。すなはち、rentier（金利生活者）の生活である。財産の利子で食ふ。戦前の荷風は幸運なランティエであつた。（略）ランティエの人生に処する態度は、その基本に於て、元金には手をつけないといふ監戒からはじまる。一定の利子の効力に依つてまかなはれるべき生活。元金がへこまないかぎり、ランティエの身柄は生活のワクの中に一応は安全であり、行動はまたそこに一応は自由

であり、ワクの外にむかつてする発言はときに気のきいた批評ですらありえた。ランティエの、いや、荷風の倫理上の自慢はただ一つ。金銭上他人に迷惑はかけない。といふことは、自分が他人から金銭上の迷惑をかうむることをいかに恐怖してゐたかといふ事情を告げるにひとしいものだらう。もしかすると、他人の所有をおびやかさないやうな迷惑ならば、もしそれがあつたとしても、決して恐怖に値するほどの迷惑ではないといふ見識なのかも知れない。戦中の荷風は堅く自分の生活のワクを守ることに依つて、すなはちランティエの本分をつらぬくことに於て、よく荷風なりに抵抗の姿勢をとりつづけることができた。ランティエ荷風の生活上の抵抗は、他の何の役にも立たなかつたにせよ、少くとも荷風文学をして災禍の時間に堪へさせ、これを戦後に発現させるためには十分な効果を示してゐる。精神もまたどこかの金庫の中につつがなく、財産とともに保管されて、そこに他人の手がふれることを拒否してゐたふぜいである。わるくない成行であつた。しかし、時は移つて、戦後の世の中になると……

戦後はランティエの生活も破れ、硬直した精神しか残らなかったというのだ。荷風の戦前・戦中の「精神の柔軟性」を引きあいに、「日はすでに落ちた。もはや太陽のエネルギーと縁が切れたところの、一箇の怠惰な老人の末路のごときには、わたしは一燈をささげるゆかりも無い」と、石川はこのエッセイを閉じるのだ。石川淳、時に六十歳。当時の感覚では、彼も十分に老人であった。戦前・戦後の荷風の断絶を言あげした「敗荷落日」は、その後の荷風像を決定したように思われる。というより、戦後に書かれた荷風小説の本格的な検討は、いまだ行われていないのである。

石川のいうランティエについては、川本三郎『荷風と東京』も踏襲し、「ランティエの経済生活」という章を立てている。だが、吉野はそういった見方に異を唱える。吉野は、荷風が父から相続した財産よりも、自力で稼いだ収入の方が多いと計算している。「荷風が他の文士と異なって財産家であったということは事実に違いないが、だからといってそれに安住して徒衣徒食し、勤労所得もなしに、女から女へと遍歴を続けたというならば、それはまったく事実に反することを私は強調したい。また女性遍歴のコストにしても、所得の支出としての面よりも、文学作品創造のための必要経費としての面が強いことも、くり返し述べておかなければならない」というのである。私は、荷風がランティエであったか否かという議論は、あまり意味がないと思う。確かにそういった側面もあったことは否定できないわけで、だからこそ、荷風は書きたいものだけを書けたのだ。ただ、この吉野の発言には、荷風を考える上での本質的な洞察が含まれている。それは「必要経費」という語に端的に現れた荷風の女性観である。荷風が愛したのは生身の女たちなどではけしてなく、彼が創造した紙の上の女たちなのだということだ。さらにいうなら、『断腸亭日乗』の中で物語に昇華した女たちと交渉する荷風散人というペルソナこそが、愛惜してやまぬ対象であったのだ。

吉野の仕事は、金・経済という切り口から荷風の本質に鋭く迫った労作として受けとめられなければならない。荷風という生き方は、経済の才覚あるなしで生活が全く変わってしまうデフレ基調のこの時代に、ますます輝いて見えてくる。